

## 〈研究ノート〉

# 「生きづらさ」の捉え方に見る流行語と学術語の狭間

## —家族病理の事象を考察する—

上田 夏生

### Abstract

Objective: In this study, the key word for the difficulty of living in modern times is "Adult Children." "As a related keyword, we will deepen our understanding of keywords based on "Adult Children," "Multi-problem Families," "Dysfunctional Families," "Poisonous Parents," and "Adult Attachment Disorders."

Methods : CiNii was used to search for keywords in research papers and single books published in Japan.

Results and considerations: (1) Transformation and production process of each term (2) the background and buzzwords of the times are arranged. As a result, it seems that there is a relation between the background of the times and the transition of terms, but it was difficult to clearly prove it. In addition, family pathology has emerged as a buzzword in the background of the era, and some of it is divided into psychiatric, clinical psychology, social work and judicial welfare according to the main areas that need to be solved. In particular, "medicalization" and psychological and social approaches, represented by psychiatric medicine, are also influenced by changes in terms.

キーワード : アダルトチルドレン、共依存、多問題家族、大人の愛着障害、毒親

### I. 研究の背景

我が国の自殺者数は、2003年の3万4427人をピークに減少傾向に転じ、2010年以降、10年連続の減少で2020年には過去最少となっている。しかし、厚生労働省報告（令和2年度自殺統計）によると令和2年は2万1081人となり、前年比912人（約4.5%）と11年ぶりに再び増加傾向にある。自殺の原因・背景では、近年流行した新型コロナウイルス感染症による生活の変化も含み、様々な要因が複合している。その中で共通していることは死を選択すること以外に解決方法が見つからず、追い詰められた結果としての「自殺」という事実である。自殺に至る前段階として「生きる意味」を見い出せなくなってしまう傾向があるが、その追い詰められた状況の説明概念として「生きづらさ」という表現が時々見かけられる。

現代では、この「生きづらさ」を発信できる場として、よく使用されているのが、ソーシャルネットワークキングサービス（以下、SNS）である。SNSでは、世代に関係なく、誰しもが発信、閲覧することができ、日常生活の配信やサプライズ、ドッキリ等のエンターテインメントなどの幅広い使用の仕方が存在し、相手から共感を得ることができるものとなっている。その中で、今まで明かされていなかった生育歴等が原因や要因となり、現代において「生きづらい」と感じていると発信する人が多く見受けられる。またSNSに投稿している当事者のみならず、他者に対して共感することや「あなたは一人ではない」と伝えるこ

とで得る安心感が精神的な安心の場に繋がっている場合も多い。

現代において「生きづらい」と感じる要因を表す言葉として、多く見られるようになったアルコール依存症の親をもつ子どもが大人へと成長して生きづらさを自認する「アダルトチルドレン」(AC)を始め、家族に焦点を当てた「多問題家族」、「機能不全家族」、「大人の愛着障害」、「毒親」といった言葉がある。上記の言葉は、幼少期に大人に対して自分の心の内を自己開示できず「助けて欲しい」と声を上げることができなかった子どもの可能性がある。その結果、大人になった時に、SNSの発信や閲覧をきっかけとして自分の育った家庭環境がよくなかったのではないかと疑問を生じやすい。また声を上げられなかった子どもは、今まで医療・福祉・教育の現場において、見過ごされてきた子どもたちの内面に問題を抱えていたと捉えることができるのではないか。

上記のことを認識するにあたり、子どもの頃に、「助けてほしい」と声に出せなかった子どもたちが、大人になって生きづらさを感じる場面に遭遇した時に自己内省した結果、自分は「アダルトチルドレン」だったのではないかと気づき、生きづらさを抱えながら過ごしている。

こうした、「アダルトチルドレン」は、1997年版厚生白書の児童虐待の現状においても記載がされている。たしかに、「アダルトチルドレン」は多くの当事者がカミングアウトをしているが、大半は心理学的なカウンセリングの対象ではあっても、社会福祉分野における支援の実践や研究論文は極めて少ない。その要因は、「アダルトチルドレン」がソーシャルワークの介入する問題の範疇と見なされておらず、あくまで心理的な治療の問題と捉えられていることによるのではないだろうか。

換言すれば個人病理として、家族（夫婦・親子を含む）の病理性に焦点を当てた呼称として、「アダルトチルドレン」に加えて、「共依存」「機能不全家族」「大人の愛着障害」「毒親」等がある。一方でソーシャルワークが介入の対象として挙げた家族を焦点とした「生きづらさ」では、「多問題家族」「パラサイト」「貧困家族」「ダブルケア」「8050問題」「児童虐待」「非行」等がある。これらの事象は、論じる立場や学問分野によって視点が異なり、社会福祉の援助対象を措定する点で混乱させやすい。

これらのキーワードには、個人病理を含む家族病理としての「生きづらさ」と社会問題としての「生きづらさ」が混在している。社会福祉の対象だけでなく精神医学や心理学、教育学、司法等、広い範疇で鳥観すれば、流行語から学術語まで様々な用語が産出されてきた。

だとすれば、この様々な用語は社会を映す時代背景と密接に関連して生み出されているのではないだろうか。

## II. 研究の目的

そこで本研究では、現代において生きづらいと感じる要因のキーワードとして「アダルトチルドレン」を軸としその関連のあるキーワードとして、「多問題家族」、「機能不全家族」、「毒親」、「大人の愛着障害」を基にキーワードの理解を深め、上記のキーワードが話題になった時代背景を深堀し、「生きづらさ」がどのような変化を及ぼしているかを探索的に考察する。

そのうえで、これら家族の病理性に焦点を当てたキーワードに現れた事象の学術的考察を通して、社会福祉が関与する問題、とりわけソーシャルワークの援助対象を明らかにした

い。

また「AC」「共依存」「多問題家族」「機能不全家族」「大人の愛着障害」を「生きづらさ」との関連で考察する理由は、次の3点の仮説を基にしている。

第1に、過去の家族関係で体験した個人的な問題ではあるが、大人になった現在（いま）起きているという意味で「生きづらさ」を当事者の内に抱えた問題であること。

第2に、「生きづらさ」は、個人的な問題としてではなく、社会の文脈で捉えられる問題であり、それゆえに5つのキーワードは「流行語」として時代背景を伴って産出されてきたのではないかと。

第3に、「生きづらさ」は、他人事ではなく、誰においても生じることであり、5つのキーワードを深堀することで、社会資源の活用や環境調整を含むソーシャルワークの介入を根拠づけることが出来るのではないかと。

### III. 研究方法

CiNii（NII 学術情報ナビゲータ[サイニィ]）を用いて、日本で発表された研究論文・単著等の中から「アダルトチルドレン」、「多問題家族」、「機能不全家族」、「毒親」、「大人の愛着障害」の各キーワードのタイトル検索を行った。本論では、5年ごとに年数表を作成する為、講演会等の資料は除いた。また、検索結果により特集として組まれた雑誌に関しては1文献としてまとめ、探索的に考察を行った。今回はCiNiiにおいて論文が全文掲載しているもののみ使用し、さらに毒親に関しては新しい用語であり、週刊誌が全般のため、インターネット検索で情報収集を行った。また、先行研究の紹介では、引用部分が長くなるため、できるかぎり筆者なりに要約を行った。

### IV. 研究結果と用語の捉え方

#### (1) 論文本数の結果

対象となった文献は「アダルトチルドレン」が72件、「機能不全家族」が18件、「多問題家族」が22件、「毒親」が11件、「大人の愛着障害」が1件であった。（図表1～3。※大人の愛着障害に関しては、検索で16件ヒットしたが、雑誌こころの科学で特集が組まれたため1文献として図では表さなかった。）

毒親と大人の愛着障害は、現状では学術用語としては認知されておらず、あくまでマスメディアが中心とした流行語の域を出ていないことが分かった。そのため、毒親に関する統計上の数字については、週刊誌に掲載された件数を挙げた。

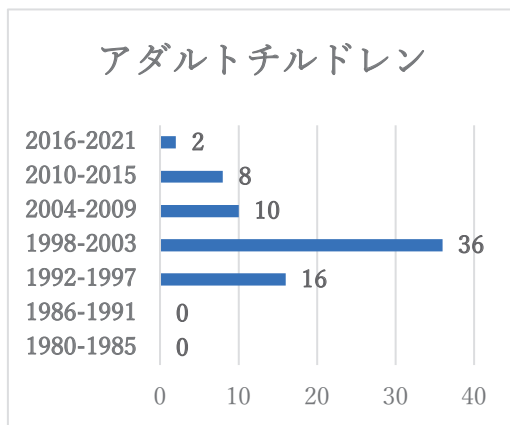


表 1

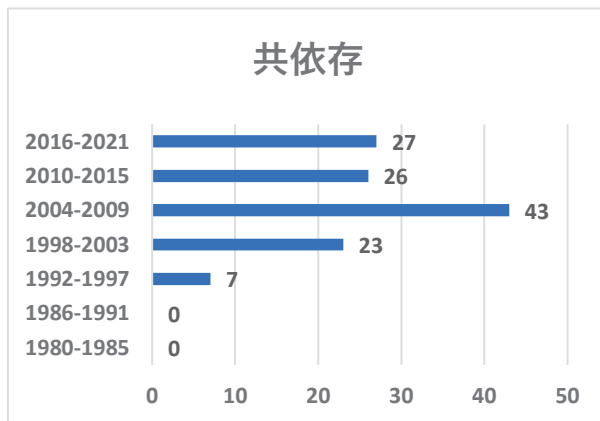


表 2

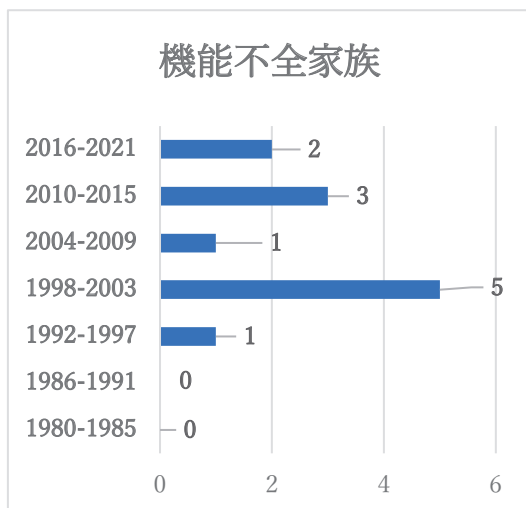


表 3

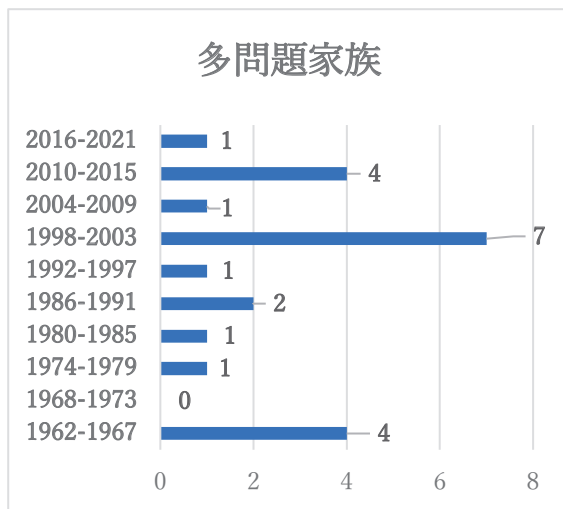


表 4

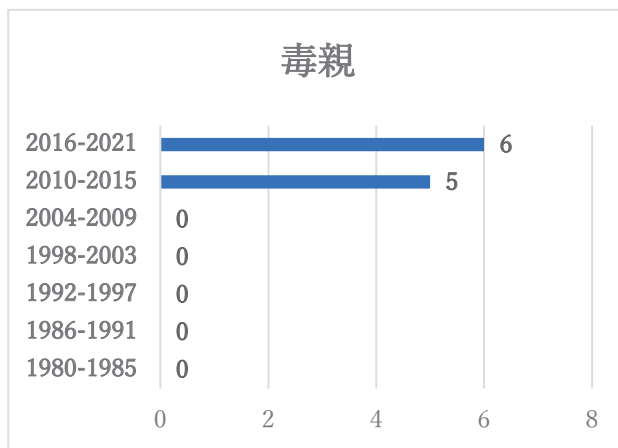


表 5

## (2)各用語の捉え方

上記の検索結果から、各用語の捉え方を探索的に抜粋して述べる。

## ・アダルトチルドレン

アダルトチルドレン (Adult Children of Alcoholics) とは、1980 年代にアメリカのアルコール依存症の治療現場でのかかわりの中で生まれた言葉として捉えられた(柴田：1998)。その後アルコール依存症の家族という概念から、ギャンブルや異性間問題等を含む、嗜癖をもつ家族に共通するものとして認識されていき、やがて何らかの問題のために機能不全に陥っている家族へと対象が幅広くなったとされる(クラウディア：1998)。

1980 年代末から 90 年代にかけてアメリカを中心に一大ブームとした、アダルトチルドレンという考え方が広がったのにはきっかけがあった。それは、1992 年にアメリカの大統領選が行われた際に、民主党のビル・クリントン候補が「自分はアダルトチルドレンだ」と自らの苛酷な生育体験を語ったことがきっかけとなっている (斎藤：2018)。

その一方で日本では、1989年に東京都精神医学総合研究所主催の国際シンポジウム「アルコール依存症と家族」が開催されたことや、1981年にアメリカのソーシャルワーカーで社会心理学博士、アダルトチルドレン（AC）と機能不全家族をめぐる研究の第一人者であるクラウディア・ブラック著作の『私は親のようにならない』を1989年に翻訳されたことからアダルトチルドレンということばが導入され、認識が広がりを見せた（信田：1997、クラウディ：1998）。森川（2006）によれば、日本においてのアダルトチルドレンの書籍のピークについては、1996年前後に集中していた。

このように日本にもアダルトチルドレンという言葉の概念が浸透したが、医療の中から病理を表す診断用語として生まれたのではなく、現場から生まれた言葉であるため、曖昧がゆえに広がりやすいメリットを持っていたが、誤解を生じやすいデメリットも備えていた（信田：1997）。また1997年版厚生白書の児童虐待の現状の一部では、「アダルトチルドレン」の内容について以下の説明がされている。

「元来、「adult children of alcoholics」、すなわちアルコール依存症の親のある家庭に育った成人を意味したが、現在では、アルコール依存以外にもギャンブルや夫婦不和などの問題を有し、本来の機能を果たしていない「機能不全家庭」に育った者も含んでいる。両親が厳し過ぎたり、過度に期待をかける場合などでも、それにより子どもが息苦しさを抱えて生きるときには、その家庭は「機能不全家庭」となることがある。このような家庭に育った者は、心に深い傷を受けたまま成長し、周囲が期待したとおりに振る舞おうとする、心から楽しむことができないなどの特徴が表れるとされている。「アダルトチルドレン」は、伝統的な心理学や精神医学の世界から認められた概念ではないが、自らがアダルトチルドレンであると認識することによって、それまで理由も分からずに抱いてきた、生きづらさから解放される事例もあり、現代社会における心の不健康を捉えた言葉であるといえよう」。このように当事者や心理などの分野のみならず行政も含め、約20年以上に渡り、幅広い時代で認識はあった。

しかし、アダルトチルドレンという語がブームとなったと同時にバッシング対象にもなり、2000年頃までには、自らをアダルトチルドレンと呼ぶ人は減少し、自助グループとごく一部の治療機関に限られ、有用な治療的定義とみなした（森川：2006）。

斎藤(2018)は、アダルトチルドレンは子どもの頃から「危険な親の機嫌を気にする子」であったり、「誰かの世話を焼こうとする大人びた子ども」であったりすることが多く、「偽親」とも呼ばれていたりすることを述べている。また成人後については、他人による評判に敏感な「演技的善人」として生き、その嘘くささや空虚感に自ら辟易していたりすると述べている。そのため機会があると精神科を訪れるが、自分が何を望み、何を得られなかったかを説明することさえ出来ないため、精神科医も適切に対処出来ないこともあり、多くの場合は、悩みは解決されることはない。伝統的な診断分類に合致させようとすることも困難であり、当事者の多くも医療には期待せず、自己治療として飲酒や非合法薬の摂取、あるいはギャンブルなどのアディクション（嗜癖）などに救いを求めるものが多い。そのため、ACA（アダルトチルドレン・アノニマス）のような自助グループに集まるが、そのような仲間に出会えることはごく一部であり、多くは人それぞれ、自分なりの安定を求めて苦闘して生涯を終えると述べている。

信田（1997）は、アダルトチルドレンの定義として三点のポイントを軸に「現在の自分の



生きづらさが親との関連に起因すると認めた人」と定義付けている。第一に、従来の自分の生きづらさは自分の性格かものの考え方など自分自身に帰せられるものか、社会体制や政治などによるものとされ社会変革の必要と結びつけられたりしていたが、生きづらさを自分という個人、もしくは社会という二極のいずれでもなく「親との関係」に起因することを認めることで免責される点。第二に自分の生きづらさを親との関係性を原因におき、親との関係を多くの要因のうちの主要な要因として認めることを「起因する」という点。第三に自分の生きづらさを辿ることで親との関係に行き着くと自ら認めた人がアダルトチルドレンである。また客観的評価で自分が決められることに慣れてしまい、自分のことは自分で決めるということが出来なくなってしまう可能性がある」と述べている。そのため見失った自分が「アダルトチルドレン」という言葉に出会ったことにより、自分にとって必要なアイデンティティとして自分がアダルトチルドレンとして認めることができた自己認知したことを「認めた人」という点。この三点のポイントから、アダルトチルドレンは「自己認知」を基本とし、「自己申告」するものであるため、病気でもなく、医療モデルにとらえきれない広がりを持っていると述べている。

また日本におけるアダルトチルドレンは、アルコール家族のような親の暴言、暴力が露わな家族は、日本の機能不全家族の一部であり、むしろ表面的には「普通」と言われる家族、また模範的な両親のもとで育った人たちがアダルトチルドレンとしての苦しみを感じていると述べている。アメリカではトラウマということばで「親から受けた心の傷」が対象化することもできる可能性も備えているが、日本のアダルトチルドレンの人たちの苦しみは親からの「愛情という名の支配」による苦しみのため、そのような対象化は困難である。そのため正しく、愛情豊かな家族に満ちた支配(コントロール)による苦しみが日本のアダルトチルドレンの苦しみとなっていると述べている。また、現実の親だけでなく、死後の親も含め、自分の内部に侵入し、自分をコントロールする親のことを筆者は「インナーペアレント」と名付けている。(信田：1997)。

また笹野(1998)らは、機能不全家族とアダルトチルドレンの関連性について実証的な研究として看護大学生 56 名を対象とし、自己評価尺度を作成し、両者の関連性についての研究結果を述べている。その結果として、機能不全家族尺度とアダルトチルドレン尺度は総得点において有意な正の相関が認められたと述べている。

#### ・ 共依存

厚生労働省生活習慣病予防のための健康情報サイトによれば、共依存とは、「依存症者に必要とされることに存在価値を見だし、ともに依存を維持している周囲の人間の在り様」とされた。元々は、アルコール依存症者を支える人であるイネーブラーとして、共依存が紹介されてきたが、現代では関係性の病としてアルコール依存症者のみならず、様々な人間関係、例えば親子関係、友人関係、恋愛関係等でも共依存が論じられ、個人病理だけでなく、社会学や政治関連にも広く使われだしている。すなわち、共依存は一般用語化するほど広く普及している。

加藤(1993)は、「嗜癖」あるいは「共依存」の概念が、精神病理学的な意味にとどまらず、社会関係論的な意味において分析されるべきものであることを示唆している。すなわち、「嗜癖」が個人の精神に起こった病理学的な異常であるとする立場に異議を唱え、他者との

関係性をめぐる異常としてとらえるべきである。」と述べている。また、「共依存」の概念が社会学的な意味を持っていることとして二点あげている。第一に「「共依存」関係のもつ構造が、全体社会のもつ構造と同型である」という点である。第二として、共依存的な関係が社会の近代化の過程上にあらわれるものであり、共依存的な関係の諸特徴は、近年化の過程と直接的に結びついている点である。二点から「共依存的な関係は、単に嗜癖治療などの臨床の現場において「治療」すべき病理的な現象にとどまらず、近年化の過程がはらんでいる根源的な問題を(少なくとも関係性の次元において)浮き彫りにするような事象である」と述べている。(加藤：1993)。

一方で野口(2009)は、誰でもが訪れる可能性がある、デートDVと共依存について大学生カップルを対象にデートDVと共依存に関する一検討を論じている。「共依存とは問題を起こすことで相手を支配しようとする人とその世話をすることで相手を支配しようとする人の二者関係を示す用語であるが、それは他者から必要とされていることへの必要であるといっても良いだろう。」と述べている。

また研究の結果として、共依存傾向の高い人の方が、デートDVを受けている傾向があったという結果が出ている(野口：2009)。

#### ・多問題家族

多問題家族の研究は、小松源助が1964年に「St. Paul 市における Family Centered Project についての考察：多問題家族と家族中心ケースワークに関する研究」で紹介し、考察したのが最初である。

山崎(1967)は「多問題家族とは“multi-problem family”の訳であるが、米英では、“hard-to-reach family”、“hard-care family”、“hopeless family”などともよばれ、セントポールのプロジェクトが公にされて以来、ソーシャルワーカーの間に急速に関心がたかまってきた」と述べている。(山崎：1967)。

多問題家族は、同一家族内において、貧困、疾病、ひきこもり、虐待、依存症、介護等を抱え、問題状況が複雑に絡み長期間にわたり家族内での解決が困難な状態にある家族のことを指している。(山崎：1967)。

渡辺ら(1967)は、多問題家族へのアプローチとして、コミュニティ資源の再編成を促進していくための方向性を三点にまとめている。第一に家族の不信感や抵抗を押さえ、援助者が家族自身の求めるニーズを正確に理解し、それに対して応えようと努めることも重要とし、相互信頼をベースにした援助関係を確立する点。第二に、家族が新しい資源システムを開発していくために必要な資源ネットワーク外のソーシャル・ネットワークそのものを拡大させ、それを活用し、家族の社会関係(ソーシャル・ネットワーク)の再構築を図ること点。第三に、多問題家族の特徴とされる、複数の機関から援助をそれぞれが受けていることで、家庭内の意見の食い違いや対立を助長し、家族の統合を妨害してしまう可能性を避けるために、家族に対するサービス、サポートを家族のニーズ充足に必要な個々の資源システムの役割配分と担当領域を勘案していくことも含め、全体的視野に立ってコーディネートしていく点である。(渡辺ら：1967)。



#### ・機能不全家族

機能不全家族は、1997年の厚生白書によるとアダルトチルドレンで述べたように「アルコール依存以外にもギャンブルや夫婦不和などの問題を有し、本来の機能を果たしていない「機能不全家庭」と呼ぶ。両親が厳し過ぎたり、過度に期待をかける場合などでも、それにより子どもが息苦しさを抱えて生きるときにはその家庭は「機能不全家庭」となることがある」とされている。(厚生白書：1997)。

「機能不全家族」という言葉についてはアダルトチルドレンと関連してついてくる言葉であり、論文の一文部分を使用されているようなものが多かった。

#### ・大人の愛着障害

大人の愛着障害とは、正式に認められた概念ではないが、2021年3月にこころの科学で特別企画として、「大人の愛着障害」の特集が組まれる程であり、成人期の精神科臨床現場において重要となってくるテーマではないかとされた(村上ら：2021)。

愛着障害という言葉については、国際疾病分類第11版(ICD-11)や精神疾患の診断・統計マニュアル第5版(DSM-5)の、「反応性アタッチメント障害」として該当している。

村上(2021)は、「大人の愛着障害」は愛着障害のある子どもが大人になっても障害を引きずったままであれば「大人の愛着障害」と考えることができる」と述べている。大人になると子どもとは異なり、子どもであれば見つけやすい愛着障害の特徴も見えにくくなることもある。また村上は「表面的には不安障害などをはじめとしたさまざまな精神疾患が前景となったり、精神疾患とははっきり言いにくい情緒の不安定など呈したりしやすいと考えられる。そのため、大人の愛着障害を見出したり、診断したりすることは簡単とは言えない」と述べている。また、成人後も長きに渡り、その人を苦しめることになりやすいとされる。

村上が述べている愛着障害は、虐待や、発達障害だけでなく、「よい子」にも着目している。「よい子」は安心感が乏しく、不安な子である可能性が高い。また精神疾患の背景としての愛着障害として「精神科外来を訪れる患者を診ていると、真面目で優しい人であるのだが、安心感や自己肯定感が乏しいと感じる人が多い。発症後にそうなったなら無理もないのだが、話を聞くと子どもの頃からである人が少なくない」と述べている。

また、子どもの基本的安心感や自己肯定感に関しては、「親との愛着関係の中で育む。この感覚が乏しいのならば、逆境体験がとくになくても、広い意味での愛着の障害と捉えて良いのではないかと述べている。村上は、愛着に問題が生じる要因として三点に分類分けを行っている。第一に虐待などの親(養育者)側の問題。第二に発達障害などの子ども側の問題。第三に不適切な養育や発達障害がない場合においても、親子関係にボタンのかけ違いが生じることがあり、それが長期化してしまうことで、子どもの成長に強い悪影響を及ぼしてしまうという問題点であるとされる。このように広義で愛着障害の存在に気づくことができることで愛着障害を改善していくことができるのではないかとされた。(村上：2021)

滝川(2021)は愛着障害の始まりは精神発達の土台形成期であるとされ、「愛着障害」が「発達障害」と繋がりや重なりを持っていることとされた。子どもに十分なアタッチメントの力がある状態でも、養育者にその力不足がある場合や何かの事情により養育者から適切な接近・接触がなされない状況が続いている場合、アタッチメントの形成が阻害される理屈

となるとされている。また、子どものアタッチメントに起きる失調として現れるが、本態は大人（養育者）のアタッチメントの失調であり、どんな負荷条件がその失調を大人にもたらす影響なのかを滝川は四点に分類している。第一に、自然の個体差としてアタッチメントの力があまり強くない場合。第二に自分が愛着障害を抱えている場合。第三にアタッチメントを十分発揮できる生活条件に欠けている場合。第四に子どもに何らかの発達の遅れがあり、両者のアタッチメントが噛み合いにくい場合である。単発的に起こることはまれであり、これらが複合して失調として起きるとされた。その中で滝川は、臨床的に愛着障害の半数以上に見られる三点目のアタッチメントを十分発揮できる生活条件に欠けている場合に着目している。着目している中で、上記にあげた四点の分類のうち、三点目の子育ての生活的な安定基盤を奪って三点目をもたらす要因の第一として、貧困による生活難と孤立を挙げている。日本の格差社会化が、貧困者や生活困難者への社会的無関心や不寛容、貧困者や生活困難な者の孤立を生み出し、社会における人々のアタッチメントを破壊していく。このような社会背景があることが上記にあげた三点目の愛着障害を招き寄せる大きな要因であるとされた。

さまざまな取り組みとして原田（2021）は生活支援と就労支援を中心に地域の支援から取り組みについて論じている。愛着の問題や愛着障害を抱えた大人が、精神保健福祉の領域において支援の対象となるが、愛着の問題そのもののケアを求めてくることは、地域の支援では少ないとされる。「愛着の問題を背景とした対人関係の構築の難しさや精神的不調のため、社会生活が困難となり、その結果、地域の支援を求める」と述べている。

愛着の問題をもつ当事者は、家庭環境や経済環境が脆弱である場合もあるとされ、愛着の問題と生活基盤の脆弱が重なり、生活基盤が低下する傾向があるとされる。また、愛着に問題がある人の背景として生育歴をみると、幼少期の逆境体験の影響において、自己肯定感が低く、自分自身の存在価値を過少化傾向があり、支援に対する不信感や絶望感を持っていることから支援を受けようと思いにくくなっているとされる。支援が必要になっている状況でも支援を求めない、切羽詰まった状態になったときに相談に来る人も多くいるのではないかとされる。また、支援に対して不信感や失望感を持たれやすく、当事者は適切な支援につながらず、ネットワークの網から離れてしまう状況を防ぐため、生活支援が必要とされたとき背景に愛着の問題もある場合があることを、支援する側が理解することが重要であるとされた。

また愛着の問題がある人に関しては人の評価や対人関係での問題等により、就労を断念してしまう可能性もある。しかし、「就労は、さまざまな人と出会い、社会のなかで役割をもち、人から認められる体験を得る大きな機会でもあり、当事者にとって就労は大きな壁でもあるが、同時に愛着の問題を克服するきっかけにもなり得る」と原田は述べている。

#### ・毒親

斎藤(2018)によれば、毒親(Toxic Parents)という言葉はスーザン・ファワードの『毒になる親(Toxic Parents)』が翻訳されたことにより、日本で浸透された。

毒親とは暴力を振るう親や、心理的・精神的に残酷な言葉で傷つけることや過干渉等による「児童虐待で一種の毒のような影響を子供に与える親のこと」(神之田：2017)をさしている。

毒親のタイプとして斎藤（2018）は四点のタイプを定義した。第一に子どもに対して関心を向けすぎてしまう過干渉とそれをコントロールする統計型の親。第二に子どもにまったく目を向けない、また日常的な身の世話まで放棄するネグレクトを行う放任タイプの無視親。第三に子どもに対して、性的な虐待や身体的虐待、罵声など心理的虐待にあたるような行動等、心身の健康及び生命にも関わる暴力を振るうケダモノのような親。第四に精神障害をもっている親等の病気の親である。また、少数として、自分の利便性のみを追求する反社会性人格の親も存在する。

これに毒親については、2012 年において、小林明子が雑誌「Aera」で掲載を行い、週刊誌等を含んだ流行語として登場した。2016 年から 2020 年とごく最近の話題として挙げられていた。近年の話題としての流行語のため CiNii の結果によると、週刊誌を中心とした結果が多かった。そのため、毒親に関しては、インターネット検索を行い情報収集した。その結果、幾つかの文献が表出された。

斎藤（2018）はアダルトチルドレン論が「毒親糾弾ブーム」に収束してしまった理由として、「「毒親」の概念には、過度な単純化が持つ力強さがある」と述べている。さらに、「「AC-毒親論」には、核家族を聖化する近代市民社会のノーテンキな「家族は天国」論への解毒剂的な意味がある。そこ（家庭）は、その中の弱者（子どもと老人）にとって地獄になり得る」と述べている。毒親論のデメリットとしては、「「これからどうすればいいのか」がおざなりにしか語られていないことである。テレビに始終出てくるような有名女優が書いた本の場合、書き手の現状そのものが未来を語っているような錯覚を与えるが、読む側がそれを実行できるような普遍性がない。AC 論のように専門家を排除して自助プログラム(具体的にはアノニマス・グループの 12 ステップ)を徹底するという方法論もない」と述べている(斎藤：2018)。

しかし、斎藤（2018）は「毒親論ブームはそれによって救われる多数の人々に支えられている。その多くは生真面目で小心で、完璧主義に囚われている比較的に若い人々である。彼らは例外なく他者からの評価に過敏で、毒親論（私の現在の苦境は未熟な親たちのせいだ）という他罰的な思考様式に救われる前までは、自分の不甲斐なさを嘆く過敏に自罰的な人々である。彼らの自罰感情は「こんな自分で親に申し訳ない」という点で、正にそのまま毒親論をひっくり返した非合理的なものだ」と述べている。

また、「「毒親論」の基底にある自罰感情だが、それはかなり切迫したもので、大なり小なりの自殺願望を伴うことがある」。斎藤（2018）は、「毒となる親」とされる親たちの殆どが、意図的に毒を与え続けてきたわけではなく、親からの愛と過保護に悩まされたと告白する毒親論者は少なくないことも現状であるとされている。

## VI. 考 察

社会福祉は、伝統的に貧困や病気、障害、失職、離婚、高齢などの理由により、生活困難に陥った人が、その個人の資産や能力や努力では解決が困難な場合に社会的に介入して対応する制度であり、憲法第 25 条にも明記されている通りである。その具体的な方法は生活保護法を始めとする各種の法制度に基づいており、対応する福祉専門職は一般にソーシャルワーカーと呼称される社会福祉士、精神保健福祉士である。今日の社会福祉の対象では、経済的な意味での生活困難な事象に加え、社会的孤立や「生きづらさ」も課題視されるよう

になってきた。

それらの中には、家族病理現象とも捉えられる一連の事象が、「社会福祉」や「臨床心理」や「精神医療」の内枠やそれらを往来する課題として論じられている用語がある。それらの用語として本研究では、「アダルトチルドレン」「共依存」「機能不全家族」「多問題家族」「大人の愛着障害」「毒親」を取り上げた。その研究の結果、以下に考察するように幾つかのことが整理されたと考える。

## 1) 時代背景

「アダルトチルドレン」・「共依存」・「多問題家族」・「機能不全家族」のキーワードが最も多くの話題として挙げられた、共通している年数が1998年から2003年であった。また上記同様に「毒親」に関しては、2012年において、小林明子が雑誌「Aera」で掲載を行い、週刊誌等を含んだ流行語として登場したことで2016年から2020年とごく最近の話題として挙げられていた。「大人の愛着障害」は、各用語の説明で述べたように、2021年3月の「こころの科学」で特別企画として取り上げられている。5つのキーワードの共通している年数を2つにカテゴリー化するのであれば、1998年から2003年と2016年から2021年の時代の分け方になる。この期間前後の時代背景には何があったのか、下記に論じる。

1990年代の大きな社会変動を挙げると、1991年のバブル崩壊以降、格差社会、学歴分断社会、完全失業率が過去最悪、下流層、新自由主義といった社会変動があった。また1995年に阪神・淡路大震災が起き、多くの人々がトラウマ経験をしたことにより「心のケア」が注目されるようになった。その他に、1990年代後半からは情報化社会、インターネットの普及率の増加が著しい。社会福祉分野では、社会福祉の基礎構造改革、児童福祉法の改正、介護保険法制定、民法改正による成年後見制度の制定などがある。なお、バブル崩壊後の1998年以降完全失業率は過去最悪状況となり、2002年、2003年、2009年に過去最多5.5%に達している。また社会文化状況として、2003年に韓流ブームにより、他国の男女の恋愛観に共感を得ていることから男女の恋愛観にも変動があった。これら1990年代からの社会変動の特徴を社会福祉の流れで述べれば、措置行政を中心とした公的福祉から個人の利用契約を基本とした共助型福祉への転換であり、公的福祉の社会保険化と捉えることが出来る。

2008年リーマンショック以降の社会変動では、更に格差社会、ワーキングプアが問題視された。また、民主党政権（2009年9月から2012年11月）時代、東日本大震災（2011年）、児童虐待の先鋭化、相模原障害者殺傷事件（2016年）等が挙げられる。

また2020年から2021年現在では、新型コロナウイルス感染症が大きな社会変動といえるであろう。

現状では不十分な整理であるが、今後掘り下げていくための初期的整理の段階として文献を時代区分で整理してみた。

しかし、上記に述べた社会変動の動きはマクロ的なものであり、個々の事象である5つのキーワードに果たして関連しているかの根拠づけは容易ではなく、これからの課題でもある。

## 2) 家族病理現象の「精神医療化」と心理・社会的アプローチ

家族病理現象には、その時代背景において「流行語」として登場し、その一部は解決を要



する主たる領域により、「精神医療」「臨床心理」「社会福祉」「司法福祉」などに対象区分される。

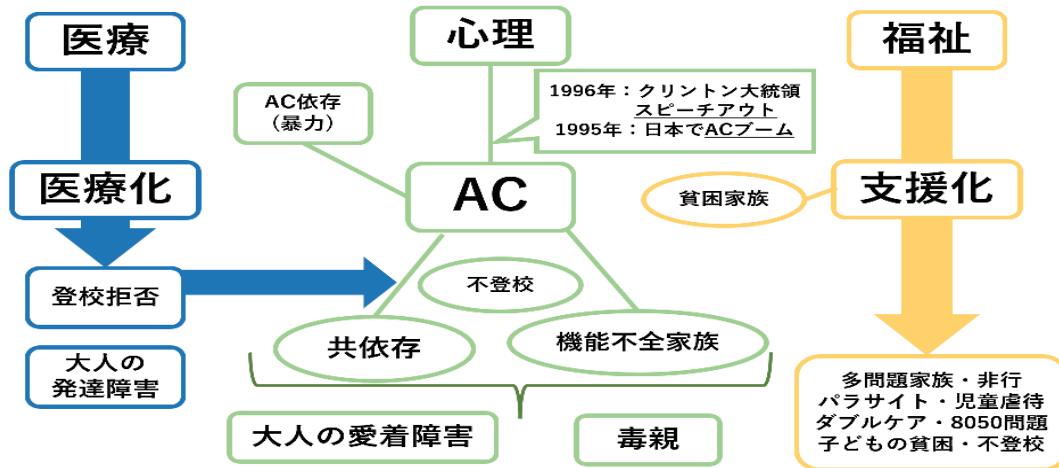


表 6

社会福祉を軸に論じれば、まず「医療化」の弊害がある。「医療化」とは、「従来は医療的領域外にあった様々な現象が医療的現象として再定義される傾向」をあらわすものであり、「諸社会現象に対して医療的対処（医学的知識による解釈とそれに基づいた医療的実践による改善、それらの制度化）をうながす歴史的傾向」を記述するものである（佐藤 1999：122-123）と説明されている。（佐藤：1999、進藤ら：1999）

「医療化」には、本来は医療の対象としては扱われてこなかった「家族病理や個人病理」や「逸脱行動」が医療の課題、すなわち治療対象として病名で診断される傾向に拡大してきた。（志水：2014）

社会福祉の対象が精神医療もしくは医療の対象（医療化）として対応されてきた歴史は長い。重度知的障害者等に対する「優生保護法」（1948 年）により強制不妊手術は母体保護法へ改正されるまでの 48 年間に 1 万 6250 件が行われた。不登校は児童生徒が学校に通うことが普通とすれば、逸脱行動であり、1970 年代まで「神経症の一種」である「登校拒否」と診断され、小児科や精神科での治療が必要とされた。しかし、文部科学省は、1998 年から「不登校」という概念を「統計法」に基づく「学校基本調査」で用いており、その定義を「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的な理由」による者を除く。）の数のことである」と再定義した。令和 2 年統計によれば、小・中学校における不登校児童生徒数は 19 万 6127 人に上り、誰にでも起こる問題と捉えるようになった。そのため、心理・社会的なアプローチを基本とするようになり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに期待するようになった。

「性同一性障害」も上記と同様である。生物学的・生来的な性と性自認（Gender Identity：ジェンダー アイデンティティ）の不一致が、Transgender（トランスジェンダー）とされ、国際疾患分類 ICD-10 の F 64 に分類されている。性同一性障害は、APA（アメリカ精神医



学界)による精神疾患リスト DSM の第3版(1980年発行)から掲載されるようになった医学概念であるが、DSM-5では、性同一性障害の診断名が排除され「性的違和(GD: Gender Dysphoria)」と記載されている。同じく、「国際疾病分類」改定版(ICD-11)が2019年5月のWHO総会で承認され、性同一性障害が「精神障害」の分類から除外され、「性の健康に関連する状態」という分類の中の「Gender Incongruence(性別不合)」に変更されることになった(2022年1月1日から効力)。これにより、出生時に割り当てられた性別への違和が「病気」や「障害」ではないと宣言されることになった。このように、トランスジェンダーを含む性的マイノリティがおかれている社会の偏見や雇用、社会保障や生活全般にわたる差別の現状から、人としての尊厳や人権保障に再定義が進み出している。

本研究が取り上げた「アダルトチルドレン」「共依存」「機能不全家族」「多問題家族」「大人の愛着障害」「毒親」は、安易な「医療化」には組み込まれていない。しかし、カウンセリングや心理治療の枠組み対象だけでいいのかどうか、社会的な支援が必要なソーシャルワークの対象としても措定できないかどうかは、これからの研究で一定の結論を得たいと考えている。

### 3) 福祉的アプローチの課題と今後の展望

上記に述べたような時代背景が関連しているかどうか、また、社会的な支援が必要なソーシャルワークの対象としても措定できないかどうかは、まだ模索している段階であるが、臨床現場において実際に幼少時の傷つき体験や、アダルトチルドレンなど問題の背景に潜んでいることは考えていかななくてはならない。その際に、各分野が守備範囲を分けるのではなく、多職種連携も含めた分野を掛け合わせる支援が必要になっていくのではないかと考える。

また公益社団法人日本社会福祉士会の社会福祉士の倫理綱領の原則VIにおいて「全人的存在」がある。それは「社会福祉士は、すべての人々を生物的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面からなる全人的な存在として認識する」と記載がされている。このように福祉が様々な側面から人々を見た時に、福祉的側面だけではなく、多職種の側面も考えていく重層的な支援体制が取れることが重要である。また上記に述べたように多職種連携も含めた分野を掛け合わせることものみならず、非専門職の人々や生活環境など様々なものを掛け合わせも大切になっていくのではないかと考える。(注) そのため、福祉×○○のように掛け合わせていくことがこれからは必要ではないかと考える。

また現段階で、社会福祉の分野で介入していくことは難しいと判断するのはまだ早計ではないかと考える。

社会的支援が必要な当事者の背景に愛着の問題が密に隠れているのならば、それは福祉的支援が可能となる。しかし、村上が述べていたように、子どもの頃に発見できた愛着障害の特徴も大人になると発見することが困難となる可能性がある。だからこそ福祉の支援対象者として明確になるためには、様々な側面からの支援体制が必要に今後はなってくるのではないかと考える。

上記に述べてきたように、「アダルトチルドレン」や「毒親」などは、流行語として社会に広がってきた。それにより、自分は当事者ではないかと感じた人々がSNS等を通じて声を挙げていることは、しっかりと眼前の課題として取り入れていくべきであると考えている。

かし、まだ「助けて」という声を出せずに苦しみを抱いて生きている人々は少なからずいるであろう。その際に流行語として捉えていくのではなく、心理的困難の事象を社会構造的に捉える視点も重要だと考える。それは現在まで、個人的病理としての言葉だったが、社会学的病理として捉え、しっかりとした支援を必要とする流行語は見逃してはならないことにも繋がる。

結果に述べたように時代の背景の中で生きづらさの変化があったかどうかは安易には述べるができなかった。しかし、世の中にアダルトチルドレンは多く存在している可能性は秘めている。

例えば、一人親家庭で育った子どもや虐待を受けてきて育った子ども、愛着を知らずに育った子ども、「ヤングケアラー」のように、自分のことより人のために生きてきた子ども、大人に安心させるために気を遣う病気の子どもの兄弟など、多くの子どもたちが現状の環境と共に葛藤し生きづらさを抱え大人になってしまっている。その環境要因は簡単には変えることは困難である。しかし、社会福祉や心理学、精神医学、死生学など幅広い分野を掛け合わせていくことで「生きづらさ」を生きやすい環境へ整えていくことは可能性ではないか。今後も研究を通じて様々な人々が「生きづらさ」を感じた時の安全基地という名のセーフティーネットを創っていきたいと考える。

最後に、本研究では、検索したすべての文献を読みこなしておらず、細部の論述を踏まえた研究の成果としては不十分さが否めないため、「研究ノート」として、ここまでの研究を整理した限界を表明しておきたい。

(注釈) 掛け合わせるとは文字通り「足し算」ではなく、「掛け算」のことである。掛け算では足し算以上にプラスαをいくつも生み出すことができる。

## 引用・参考文献

- ・厚生労働省 自殺の統計 令和2年中における自殺の状況
- ・柴田啓文「<論説>アダルト・チルドレンをめぐる諸概念の検討」(pdf)『四日市大学論集』第11巻、四日市大学、1998年
- ・クラウドディア・ブラック「もちきれない荷物をかかえたあなたへ アダルト・チャイルド、そして摂食障害・依存症・性的虐待...いくつもの課題をのりこえる生き方の秘訣」(株)アスクヒューマンケア 鈴木美保子訳 水澤都加佐監訳 1998年
- ・斉藤学 公益財団法人 日立財団 Web マガジン「みらい」VOL.2 論文特集「親子関係の解剖学～その闇に迫る」 「毒親と子どもたち」2018年
- ・信田さよ子 「アダルト・チルドレン-私の物語をつくり直す-」日本家政学会誌 1997年
- ・厚生白書 1997年版厚生白書
- [https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/kousei/1997/dl/05.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1997/dl/05.pdf)
- ・森川友子 九州産業大学国際文化学部紀要 「現代日本における被害者像の変遷に関する一考察」 2006年
- ・笹野友寿 塚原貴子 川崎医療福祉大学 川崎医療福祉学会誌「大学生の精神保健に関する研究—機能不全家族とアダルトチルド・チルドレン」1998年
- ・加藤篤志 関東社会学会 年報社会学論集 「社会学的概念としての「共依存」：関係論

的視点から」 1993 年

・野口康彦 山梨英和大学紀要 「大学生カップル間におけるデート DV と共依存に関する検討」 2009 年

・厚生労働省生活習慣病予防のための健康情報サイト

<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/alcohol/ya-058.html>

・小松源助 日本社会事業短期大学研究紀要 「St. Paul 市における Family Centered Project についての考察：多問題家族と家族中心ケースワークに関する研究」 1964 年

・山崎道子 一般社団法人 日本社会福祉学会 「II 取扱い家族の特性とケースワークサービス(多問題家族への多面的組織的アプローチの必要性-実験過程における家庭福祉センターの役割-,自由論題)」 1967 年

・渡辺顕一郎 松岡克尚 一般社団法人 日本社会福祉学会 「多問題家族へのアプローチ：家族とコミュニティ資源との関係から」 1991 年

・村上伸治・青木省三 特別企画 大人の愛着障害 2021 年

・村上伸治 日本評論社 こころの科学 「臨床現場における成人期の愛着障害(大人の愛着障害)--(成人における愛着障害を考える)」 2021 年

・滝川一廣 日本評論社 こころの科学 「愛着障害、発達障害、複雑性 PTSD をどう考えるか(大人の愛着障害)--(成人における愛着障害を考える)」 2021 年

・原田修一 郎日本評論社 こころの科学 「地域の支援から考える：生活支援・就労支援を中心に(大人の愛着障害)--(さまざまな取り組み)」 2021 年

・神ノ田昌博 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 [https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/siryoku\\_1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/siryoku_1.pdf) 2017 年

・佐藤哲彦 「医療化と医療化論」 1999 年

・進藤雄三・黒田浩一郎 世界思想社 『医療社会学を学ぶ人のために』

・志水洋人 「医療化論の動向—逸脱行動の医療化から疾患概念の拡大へ—」『年報人間科学』 2014 年

・公益社団法人日本社会福祉士会 「社会福祉士の倫理綱領」 2020 年

<https://www.jacsw.or.jp/citizens/rinrikoryo/>

上田 夏生(うへだ なつき) 東京通信大学 指導補助者